

存在表現における「～がある」構文

白 愛 仙

1 はじめに

存在という事実が、「ある」によって、描写され、判断され、伝えられる場合、動詞「ある」の意味は、「ある」の語彙的意味によってのみ表わされるのではなく、それが用いられる構造的なタイプも重要な役割を果たしている。

一方、存在は単純なものではなく、「世の中には様々なものがある」「世の中には不思議なことがたくさんある」のような、無形の事柄の存在から、「机の上に本がある」「大阪に出張がある」のような、具体的な位置を示す存在（もの・ことの存在）まで幅広く用いられる。「～に～がある」という同じ構造がさまざまな構造的なタイプを規定している。また、これらの構造における「<～に>→<～には>」や「<～が>→<～は>」のような形式の問題は、主題提示的な言い方として、単なる事実の描写とは異なる文レベルにおける、新情報・旧情報、主題化の提示などの問題が複雑にからんでいる。

そこで、本論では、存在表現における「ある」構文に注目し、「～がある」の拡張という文法現象、文レベルでの新情報・旧情報、主題化の提示問題、構造的なタイプにおける要素のカテゴリカルな意味、要素の関係的な意味（意味的なむすびつき）を分析することで、存在表現における「ある」構文の特質としての文の機能構造・意味構造の解明を試みる。

2 「～がある」構文

構文の意味とは、文の構造におけるいくつかのカテゴリカルな意味のあいだの関係的な意味にはかならない。これらの意味の関係は、名詞の格変化（あるいは格助詞）によって作りだされるわけではない。名詞の格変化はこの関係的な意味を表現しているにすぎない。そこで、文の構造の要素としての単語の意味が注目される。単語は、現実の一片とかかわりながら、これを名づける働きを有し、その名づける内容にさまざまな意味が認められる。一方、文の直接的な構成要素として、文のなかに入り込むとき、ほかの単語と関係的な意味（＝構造的なむすびつき）をつくりながら、そのなかで一定の文法的な役割をはたしているところ

ろに、もうひとつの意味が認められる。そこで、「～に～がある」という同じ構造がさまざまな構造的なタイプを規定しているとしても不思議ではないし、出来事の通達に混乱をきたすこともない。

そこで、「～がある」構文が、どのような構造的なタイプを規定するかは、動詞「ある」の有する文法的な性質によってのみ表わされるのではなく、「が格」名詞としての存在物の性質とも大きく関係している。例えば、「が格」がものを表わす場合、「～がある」の拡張は存在場所を問題にし、「が格」がことを表わす場合、「～がある」の拡張は場所（発生場所・行われる場所）と時間を問題にする。

2・1 「が格」がものの場合の構造的なタイプ

「が格」がものを表わす場合、「～がある」は場所名詞によって、拡張することが可能である。これらの場合、場所名詞は「～に」「～には」で示され、「～に～がある」「～には～がある」のような構造が用いられる。そこで、「に格」と「が格」は、〈存在場所〉と〈存在物〉との関係的な意味を表わし、動詞「ある」は存在の意味を表わすことになる。

(1) 山の中の道のかたわらに、椿の若木がありました。（牛をつないだ椿の木）

(2) 御机の上には前の奥様の古びた御写真が有ました。（旧主人）

例(1)(2)のようなものの存在において、存在場所は、「～は」の形式はとらない。そこで、ものの存在において、動詞「ある」は、「ある場所に - あるものが - 存在する」のような「～に～がある」という構造が用いられるが、構造における各要素の意味、要素のあいだの関係的な意味は、「～に～がある」という構造を異なる構造的なタイプとして規定することになる。例えば、「机の上に本がある」「机に傷がある」の用法は、「が格」名詞と、「に格」名詞（あるいは名詞句）が共起するという構文的な特徴を用いるが、「机に傷がある」における「傷がある」は、「机」を特徴づけると言えるが、「机の上に本がある」における「本がある」は、「机の上」を特徴づけると言えないだろう。

ここで、注目したいのは、「机の上に本がある」の場合、「本」は独立的なものであるが、「机に傷がある」の場合、「傷」は独立的なものではない。これらのことが、「～に～がある」という構造における動詞「ある」と「に格」名詞、「が格」名詞との結合力（むすびつき力）に反映されると考えられる。「が格」における名詞が抽象化されることによって、ものとしての独立性が弱くなり、従って、動詞「ある」とのむすびが強くなる傾向があると考えられる。また、「が格」と動詞「ある」のむすびが強くなると、「に格」と「が格」の語順の置き換えが不可能になる傾向があると考えられる。

机の上に本がある。 ⇔ 本が机の上にある。

机に傷がある。 ??傷が机にある。

例えば、「机の上に本がある」のように「が格」の存在物が独立的である場合、「に格」と「が格」は語順を置き換え、「本が机の上にある」と言えるが、「机に傷がある」のように「が格」の存在物が抽象的で、存在場所に付着的に存在する場合、「が格」と「ある」のむすびが強くなり、「が格」と「に格」の語順の置き換えが難しくなる。「傷が机にある」のような言い方は不自然であろう。

そこで、ものの存在において、動詞「ある」が「が格」とのむすびが強くなると、「～に～がある」は「～が～にある」への置き換えが不可能になり、「～がある」が「～に」で示されるものの特徴を表わす傾向があると言える。なお、「～がある」が「～に」で示されるものの特徴を表わす場合、動詞「ある」と「が格」のむすびが強くなるとは限らない。

(3) 家の前に車がある。

(4) 家の前に木がある。

(5) 家の前に畑がある。

例(3)(4)(5)のように、「が格」の「車」「木」「畑」などが、「に格」の「家の前」という存在場所と関係をもつ場合、例(4)(5)の「木がある」「畑がある」は「家の前」の特徴を表わすと言えるが、例(3)の「車がある」は「家の前」の特徴を表わすとは言え難い。ここで、注目したいのは、「木」「畑」は、「家の前」の固定的な存在物であるが、「車」は、「家の前」の固定的な存在物ではない。ある存在物がある場所に固定的に存在する場合、その存在物は、その存在場所を特徴つける傾向がある。なお、「が格」の存在物が「に格」の存在場所に固定的に存在することは、動詞「ある」と「が格」のむすびが強くなっていることを意味するものではない。その固定的な存在物が具体的なものか、抽象的なものかが重要である。具体的なものであれば、「～に～がある」という構造は「～が～にある」という構造への置き換えが可能である。

2・2 「が格」が行事・発生的なことの場合の構造的なタイプ

「が格」が行事・発生的なことを表わす場合、「～がある」は、場所詞によって拡張する場合もあれば、時間詞によって拡張する場合もあり、場所詞と時間詞を共起する場合もある。本節では、時間を伴う場合と場所を伴う場合を考察することにする。

2・2・1 時間詞を伴う場合

「～がある」が時間詞によって拡張する場合、その時間詞は、「～トキ」「～ト

キに」「～トキには」「～トキは」のような形式で示される。なお、「～がある」が、時間詞によって拡張される場合、時間が注目されるか、ことが注目されるかの問題がしばしば見られる。

タイプ「トキに - ナニカ (=こと) が - ある」は、「トキに」という時間が注目され、一般的に、予定的・予測的なことを表わす傾向がある。例えば、例(6)のように予定的な行事の行われを表わす場合もあれば、例(7)のように予測的な自然現象の発生を表わす場合もある。

(6) この土曜日にクィーンズ・ホールでシーズンあけの音楽会がありますが、
エスモンド街にいながらにしてそれが聴けるのは幸です。(道標)

(7) 五日乃至十日に雨とか風があることは東洋の諺では自然が順調だといふこ
とになってゐる。(風と裾)

一方、タイプ「トキ - ナニカ (=こと) が - ある」は、「ナニカがある」ということが注目され、一般的に、過去のこと、予測外の偶然的なことを表わす傾向がある。例えば、例(8)のように過去の出来事を表わす場合もあれば、例(9)のように予測外の偶然的な出来事を表わす場合もあり、例(10)のように原因・きっかけ的な出来事を表わす場合もある。

(8) 三七日の夜、あらたまって親族会議があった。(青春の逆説)

(9) 私が西洋からの帰途上海へ上陸した折、ちょうど支那人の洋画展覧会があっ
たのでのぞいてみた。(油絵新技法)

(10) お八重が来てから、二月ばかり経った頃だった。その日、宴会があつて、
新一郎は、十一時近く微酔を帯びて帰って来た。(仇討禁止令)

ところで、タイプ「トキには - ナニカ (=こと) が - ある」、タイプ「トキは - ナニカ (=こと) が - ある」は、上記のような制限はなくなり、例(11)のように時間が強調される場合もあれば、例(12)のように状況の説明が強調される場合もあり、例(13)のように文脈になんらかの経験的な根拠を背景にする場合もある。

(11) 大正十二年の開会日は朝ひどい驟雨があつて、それが晴れると蒸し暑くなっ
て、竹の台の二科会場で十一時五十八分の地震に出会ったのであった。(自然と生物)

(12) この月の五日には観潮楼歌会があつて、佐々木博士、吉井、北原、與謝野、
伊藤、古泉、斎藤、平野、上田、諸氏が集った。(パンの会の回想)

(13) ある夏の晩に、私は兄弟や従兄等と一緒に、大屋根の上の火の見台で涼んで居ました。「お月様とお星様が近くにある晩には火事がある。」十歳ばかり
の私よりは余程大きい誰かの口から、こんなことが云はれました。(私の生ひ立ち)

2・2・2 場所詞を伴う場合

この存在において、事件・事故・火事・行事・自然現象などは時の流れの中のある時、ある場所で発生する・起こる・行われることであるが、場所を問題にする場合、ものの存在と異なり、その場所は「～に」（「場所に」）「～で」（「場所で」）で示される場合がある。

そこで、ある場合は「場所に」を伴い、ある場合は「場所で」を伴い、ある場合は「場所に」「場所で」が共に可能なケースが認められる。

例えば、「会議がある」「宴会がある」「花火がある」「地震があった」「事件があった」のような場合、これらの「～がある」は、「場所に」によって拡張されることも可能であり、「場所で」によって、拡張されることも可能である。これらの場合、「場所に」と「場所で」の置き換えは可能である。

しかし、「自殺がある」「喧嘩がある」「テストがある」「試合がある」のような場合、これらの「～がある」は「場所で」による拡張は可能であっても、「場所に」による拡張は不可能である。また、「用事がある」「故障がある」「災難がある」のような場合、これらの「～がある」は「場所に」による拡張は可能であっても、「場所で」による拡張は不可能である。

ところで、ある現実が、二つのタイプで表現することができるが、いずれのタイプを選ぶかということは、より重要なことを抽象することとからんでいて、また、なにを表現すべきか、なにを強調すべきか、ということとからんでいて、そこには表現上の自由が保証されていると考えられる。なお、この存在における「～がある」の拡張が、「場所に」になるか、「場所で」になるかは、「～がある」全体が求めるもので、特に「が格」の事実的な意味が重要である。これらの場合、「ある」と「が格」のむすびが強くなり、「が格」と「に格」の語順の置き換えは不自由になる。

3 非過去形「ある」の現在と未来

ものの存在における動詞「ある」の非過去形は、現在を表わすことになるが、この存在における動詞「ある」の非過去形は、現在を表わす場合もあれば、未来を表わす場合もある。

例えば、「ここに一つの事件がある」「近国に戦乱がある」「計画に重大な瑕疵がある」のように、「が格」が「事件・戦乱・瑕疵」のような発生的なこの場合、非過去形「ある」は、現在を表わすことになる。また、「が格」が「出張・研究会」のような予定的な行事の場合、「大阪に出張がある」「K大学に研究会がある」における非過去形「ある」は未来を表わすことになる。

ところで、「学校で検討会がある」「教会で説教会がある」における非過去形

「ある」は、未来を表わすことになるが、「今」のような時間詞が示されることになると、非過去形「ある」は現在を表わすことも考えられる。

なお、発生的なことが〈場所で〉を伴う場合、動詞「ある」の非過去形の使用には制限が見られる。例えば、「事件がある」という発生的なことの存在が、〈場所に〉によって拡張される場合、「ここに一つの事件がある」のように、動詞「ある」の非過去形の使用が可能であるが、〈場所で〉によって拡張される場合、「ここで一つの事件があった」のように、動詞「ある」の過去形が使用される。つまり、〈場所で〉による「事件」の発生は、すでに発生した出来事の伝達を表わす傾向がある。

- (14) 尚高林家では前にも後嗣高林靖二郎氏の失踪事件があったので、（「瓶詰地獄」他）

そこで、現在を表わす場合の「ある」は、状態動詞の特徴に近く、未来を表わす場合の「ある」は、動作動詞の特徴に近いと考えられる。なお「ある」が、状態動詞（「ある」の非過去形が現在を表わす場合）に近い場合、〈場所に〉が〈場所で〉への置き換えが難しくなる。

一方、「が格」が予測的・予定的なこととして、「～がある」が時間詞によって拡張する場合、タイプ「トキに - ナニカ（＝予測的・予定的なこと）が - ある」における「ある」の非過去形は、未来を表わす。

- (15) この土曜日にキーンズ・ホールでシーズンあけの音楽会がありますが、
エスモンド街にいながらにしてそれが聴けるのは幸です。（道標）

- (16) 「明後日の夕方までに東京に戻りたいんです。アルバイトに行かなくちゃいけないし、木曜日にドイツ語のテストがあるから」（ノルウェイの森）

なお、予測的な自然現象の発生を表わす「明日、雨がある」「明日、風がある」のようなものの存在は、タイプ「トキ - ナニカ（＝自然現象）が - ある」が用いられる。これらの構造における「ある」の非過去形は未来を表わすことになる。また、「今、テストがある」「今、会議がある」のように、時間詞が「今」になる場合、動詞「ある」の非過去形は、現在を表わすことになる。つまり、時間詞によって、動詞「ある」の非過去形は、未来か現在を示す傾向がある。

4 「～がある」存在

ことばで表現すべき現実とは、まるごとの一つの総体的な現実である。一まとまりとして、みごとに構造されている。しかし、これらの現実をことばによって表現するということになると、当然のことながら、現実が新情報であるか旧情報であるかが問題にされる。これらは動詞「ある」文においても例外ではない。「ドコカに - ナニカが - ある」という構造は、〈場所〉に〈もの〉が存在することを

意味しているが、構造における要素のカテゴリカルな意味、要素の間の関係的な意味によって、規定される構造的なタイプは、実は現実の存在を描写することである。これらの現実の存在描写は、単純なものではなく、文レベルにおける、新情報・旧情報、主題化の提示などが複雑にからんでいる。

4・1 新情報と旧情報

「机の上に本がある」という現実があるとする。この「机の上に本がある」という現実は、一まとまりの客観的な現実の描写として、新情報を伝えると言える。ところが、「机の上には本がある」のように「～に」が「～には」として主題化されると状況はかわる。「机の上には本がある」は、すでに知っている情報として、それをだれかに伝えたり、説明したりしている文である。ところで、「机の上に本がある」「机の上には本がある」の二つの文を比べたとき、「机の上に本がある」は、実際に本が存在する描写文であり、「机の上には本がある」は、「本」が「ある」か「ない」か、という判断をくだした文である。「本」があるのは、「机の上」なんだと場所を指定し、それを他と判別している。

そこで、発見的な存在として、「あっ、机の上に本があった」とは言っても、「あっ、机の上には本があった」とは言わない。存在表現に発見的なニュアンスが表われる場合、「～に～がある」の構造が用いられ、また、これらの発見的な存在表現は、「～すると～」「～したら～」のような条件節を伴う傾向がある。

- (17) 戸をあけると、三和土の右側に四畳半位の板のあいだがあり、机と椅子が二つ窓側に並び、そのうしろに帳簿棚が、その前にも机と椅子があった。
(青春の逆説)

- (18) ある日の晩大町と云う所を散歩していたら郵便局の隣りに蕎麦とかいて、下に東京と注を加えた看板があった。(坊っちゃん)

例(17)(18)は、「～に～がある」という構造を用い、客観的な現実の描写として、新情報を伝達する存在表現であるが、これらの「～に～がある」構造が、「～すると～」「～したら～」のような条件節を伴うことで、発見的なニュアンスが感じられる。これらの発見的な存在における「ある」は過去形を用いる傾向がある。このように、「～に～がある」は、新情報として、発見的な存在を表わす場合があるとすれば、「～には～がある」は、旧情報として、存在場所が主題化されることで、「～には」と「～がある」は、主題と説明(叙述)との関係として、「～がある」が「～には」の説明になる。これらの場合、「～がある」全体が並列する場合もあれば、存在物が並列する場合もある。例えば、例(19)は「～がある」における存在物の並列であり、例(20)は「～がある」全体の並列である。

- (19) つや子にからみつかれたまま伸子たちが通りぬけるがらんとした控間のす

れた赤いカーペットの上には、二つの大きい鋤うちの航海用トランク、泰造用のインノヴェーション・トランク、そのほか大トランク、小トランク、荷物の山がある。(道標)

- (20) 彼はある日城の傍の崖の蔭に立派な井戸があるのを見つけた。そこは昔の士の屋敷跡のように思えた。畑とも庭ともつかない地面には、梅の老木があったり南瓜が植えてあったり紫蘇があったりした。(城のある町にて)

4・2 新情報の本質

われわれが話をする場合、文に表わされるにしる、暗黙のうちに了解されるにしる、必ずある物(人間を含めて)が基礎におかれ、それについての言表がなされる。すなわち、その物の性質・状態・動作、あるいは他のものとの関係など、要するにそのもののあり方について相手に対して述べられるのである。つまり、現実としてのその物とそのもののあり方全体が文によって表わされる意味内容になる。

なお、存在を示す「ある」は、一般的には動詞の中に入れられるけれども、他の動詞とはやや違った特色を示している。その根拠は、存在は普通動詞が原型的に表わす動作や行為とはことなるところにある。また、それは性質や状態でもない。つまり、存在は物のあり方ではなく、あること自身である。そもそも、判断は、まず、ある実体(物)の存在を措定する存在判断があり、その上に、その物の属性の存在についての判断が加わる背景的な意味をもつものである。例えば、「川に橋が架けられている」の場合、「川に橋がある」ということは、自明のことである。その意味では、「川に橋が架けられている」は「川に橋がある」の意味をもつ二重構造を表わしていると言える。

従って、ある物のことを述べるとき、その物の存在は自明のことであって、いちいち言葉にする必要はない。ただ、文章のはじめに(場合によっては、その中間にでる)ある物を新たに提示する場合に、その物の存在をいわなければならない。そこで、そのいわなければならないところにある目的があると考えられる。

例えば、昔話の冒頭の、「むかしむかし、あるところに おじいさんと おばあさんが ありました。」のように存在の「ある」が使用されるには、それなりの目的がある。新情報として、聞き手に伝えられ、次に、それが共通話題となって、存在物(存在者)としてのおじいさんとおばあさんを、次の文に展開するところに意味がある。つまり、

おじいさんは 山へ しばかりに いきました。

おばあさんは 川へ せんとくに いきました。

このように、「ドコカに - ナニカが - ある」という構造としての人物や事物の

存在する事実を述べる文は、単なる場所にもものが存在しているという意味を伝えるだけのものではない。まず、新情報として、聞き手に伝えられ、次に、それが共通話題となり、下の文に展開していくところに意味がある。なお、これらの展開は様々である。

(21) ある小さい駅を通過した時、女がにない棒の両端へ木の桶をつって、水汲みに来たのを見た。駅の横手の広っぱに井戸がある。井戸側は四角い。ふたがちゃんとついている。大きな輪があって、そこについている小さいとってで輪をまわし、繩をゆるめて水を汲みあげる仕掛になっている。シベリアの方でも田舎の井戸はこんな形だった。(新しきシベリアを横切る)

このように、「駅の横手の広っぱに井戸がある」という新情報が伝えられ、さらに、新情報における存在物「井戸」が、次の文において、「井戸側は四角い。ふたがちゃんとついている。」のように主題として展開される場合がある。また、例(22)のように次の文で対象語として示される場合もある。

(22) 襄陽では、温は刺史徐商の下で小吏になって、やや久しく勤めていたが、終に厭倦を生じて罷めたのである。温の机の上に玄機の詩稿があった。李はそれを見て歎称した。そしてどんな女かと云った。(魚玄機)

例(22)の「李はそれを見て歎称した」における「それ」は、実は、「温の机の上に玄機の詩稿があった」における存在物である。

このように、存在表現における新情報は、その存在物の展開が注目されるが、存在表現の構造的なタイプによって、その展開が存在物に限らないところにも注目したい。タイプ「トキに - ナニカ (= 予定的・予測的な出来事) が - ある」のような予定的・予測的な新情報は、その時間が注目され、例(23)のように時間詞が次の文に展開される場合もある。

(23) 四月十日に課目登録があるから、その日に大学の中庭で待ちあわせて一緒にお昼ごはんを食べないかと彼女は書いていた。(ノルウェイの森)

例(23)における「課目登録がある」は、予定的なこととして、その行われが「四月十日」として、「四月十日に課目登録がある」は、新情報の伝達であると言える。しかし、これらの新情報は、「課目登録がある」ということを伝えようという意図より、「四月十日」というその日を利用しようという意図が見られる。これらのことは、「四月十日」というその日のもう一つの予定的な計画から了解できる。例えば、「その日に大学の中庭で待ちあわせて一緒にお昼ごはんを食べよう」という計画は、「課目登録がある」その日を利用することである。そこで、「四月十日に課目登録がある」という新情報は、「課目登録がある」という「ナニカを行う」という事態の伝達より、「四月十日」というその日を利用しようという意図が強く感じられる。

このように、「～に～がある」という新情報は単なる情報の伝達ではなく、その情報のあるそく面を展開するところに、深い意味があると考えられる。

4・3 主題化の本質

新情報としての「ドコカに - ナニカが - ある」は、その「ナニカ」という存在物が、次の文において展開される傾向があるが、旧情報としての「ドコカには - ナニカが - ある」は、その「ドコカ」と「ナニカ」という存在場所・存在物が、次の文において説明される傾向がある。例えば、「～には」の説明が、次の文まで及ぶ場合もあれば、「～がある」における内容が、次の文でさらに説明される場合もある。

- (24) 机の上には和製のマジョリカ皿があった。薔薇の造り花がセセッション式の一輪瓶に挿してあった。白い大きな百合を刺繍にした壁飾りが横手にかけてあった。(行人)

これらの場合、「薔薇の造り花がセセッション式の一輪瓶に挿してあった。」
「白い大きな百合を刺繍にした壁飾りが横手にかけてあった。」は「机の上には和製のマジョリカ皿があった。」における「机の上」の説明である。このように、「～には」における説明は、次のいくつかの文に及んで説明される場合がある。

- (25) 机の上には、短い曲の譜があった。「神の意のままに」という題で、男女の別離を歌ったものだった。メンデルソオンの曲だ。(家)

これらの場合、「神の意のままに」という題で、男女の別離を歌ったものだった」は、「机の上には、短い曲の譜があった」における存在物「短い曲の譜」に対する説明である。このように、存在物の内容が、次の文において説明される場合がある。

4・4 「～がある」存在の連続

現実においては、存在物は常に様々な理由を与えられて存在し、我々もまたそのような存在理由・在り方を当然のこととして通常気にも留めない。対象が人工物・製品であればその傾向はなおさら強まっている。ところで、人類が生み出す存在物（人工物）は意図的であると言える。つまり、日常生活の中の個々の具体的な存在物は、人間とは無関係に、偶然にそこにあるものではなく、何者かによって意図的にその場所に置かれたものなのである。その存在物が人工的なもの、例えば建築物であれば、それは人間があらかじめ設置場所を定めたうえで、人間の手によって産み出されたものであるから、「橋がその川に架けられている」とか、「ビルは駅前に建てられている」と表現して、存在の意味とつながる。つまり、人間の「架ける」「建てる」という作業によって、新たなものが存在するという

意味が内包されている。

そこで、「川に橋がある」「駅前にビルがある」ということは、実際、誰かの「架ける」「建てる」という作業の結果の存在として、実は、「川に橋が架けられている／川に橋が架けてある／川に橋が架けている」、「駅前にビルが建てられている／駅前にビルが建ててある／駅前にビルが建っている」という存在起因・存在様態を背景にしていると考えられる。つまり、存在の意味において、「～が～している」「～が～してある」は、「～に～がある」に連続していると考えられる。例えば、

- | | | |
|------------|---|--------------------|
| 川に橋がある。 | → | 川に橋が架けてある／架けている。 |
| 駅前にビルがある。 | → | 駅前にビルが建っている／建ててある。 |
| 机の上に本がある。 | → | 机の上に本が置いてある。 |
| 鞆の中に財布がある。 | → | 鞆の中に財布が入っている。 |

また、客観的なものの存在は、視覚でその存在が確認できることで、「遠くに線路がある」は「遠くに線路が見える」とも言える。そこで、存在の意味において、「～に～が見える」は、「～に～がある」に連続していると言える。

さらに、「家の前に畑がある」のような、「に格」の場所と「が格」の存在対象が広がり性を見せる場合、「家の前は畑である」のようなコピュラ文に連続すると言える。

このように、存在は、孤立的なものではなく、それぞれの存在には、その存在の起因・存在様態が背景的に、存在の意味としての連続性を見せていると考えられる。

5 おわりに

本論文では、ものの存在・ことのある存在の「～がある」構文の拡張という文法現象に注目し、構造的なタイプにおける関係的な意味を分析することで、「～に～がある」構造の特質としての「～に」と「～が」の置き換え問題、「<～に>→<～には>」や「<～が>→<～は>」のような形式の問題、また、文レベルにおける新情報・旧情報、主題化の提示、存在の背景などの問題を解明した。

また、ことのある存在における「場所に」と「場所で」の表現上の特徴を解明し、さらに、動詞「ある」の非過去形が現在を表わす場合、未来を表わす場合の構造的なタイプが規定することで、「ある」の形態論的な特徴を解明した。

用例出典
青空文庫

主要参考文献

- 大塚望 2004 「「～がある」文の多機能性」『言語研究』 日本語言語会発行
- 岡智之 2003 「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク」『認知言語学論考』
- 奥田靖雄 1983 『日本語文法・連語論（資料編）』言語学研究会編 むぎ書房
- 国立国語研究所報告 1963 「話しことばの文型（2）」（独話資料による研究） 秀英出版
- 国広哲弥 1997 『理想の国語辞典』大修館書店
- 鈴木康之 2003 『日本語学の常識』海山文化研究所『日中言語対照研究』4号
- 高橋太郎・屋久茂子 1984 「「～がある」の用法一（あわせて）「人がある」と「人がいる」の違い一」『国立国語研究所報告79 研究報告書5』（1-42）
- 野田尚史 2000 「語順を決める要素」『月刊言語』（29-9）大修館書店
- 野村剛史 2003 「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』第73巻第8号-828号-
- 白愛仙 2006 『現代日本語における動詞「ある」文の研究—「～がある」構文を中心に—』博士論文
- 白愛仙 2006 「出来事存在について—「～がある」構造を中心に—」大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻『日本文学研究誌』第4輯 47～118頁（B5）
- 白愛仙 2006 「探讨动词「ある」做谓语的句型」『汉日语言对比研究』北京外国语大学 国际交流学院 编 学苑出版社（27-36）
- 白愛仙 2005 「に格・が格の名詞と動詞「ある」との組み合わせ」『解釈と鑑賞』890至文堂
- 福地肇 1983 「語順にみられる談話の原則」『月刊言語』12月号 大修館書店
- 益岡隆志 2003 『三上文法から寺村文法へ 日本語記述文法の世界』くろしお出版
- 松村明 1999 『大辞林』三省堂
- 松村明 1998 『大辞泉』小学館
- 三上章 1967 「存在文の問題」大谷女子大学紀要第3号